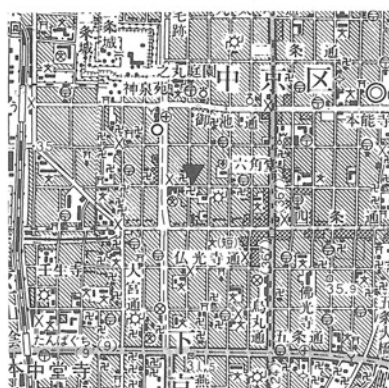




(京都市北部・京都市東北部・京都市西南部・京都市東南部)

京都・平安京跡

- 1 所在地 京都市中京区蛸薬師通油小路東入元本能寺南町
- 2 調査期間 二〇〇二年(平14) 八月～二〇〇三年八月
- 3 発掘機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所
- 4 調査担当者 平尾政幸・藤村敏之・山口 真
- 5 遺跡の種類 都城跡、都市跡
- 6 遺跡の年代 平安時代～近代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

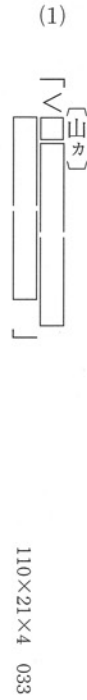
調査地は平安京跡左京四条二坊十四町の西北四分の一町に該当する。仁和寺所蔵古図によれば、平安時代中期には十四町に縫殿頭藤原為兼の邸宅や大和国竹林寺に関わる土地があったと記されているが、正確な位置は不明である。北側の十五町は、現在寺町通御池に所在する本能寺の旧地にあたる。森幸安の『中昔京師図』には「本能寺地」として今回の調査地である十四

町を含めた南北二町の範囲が指定されているが、今回、調査地の北端部で下京惣構の濠が検出されたため、寺域は十四町には及んでいなかったことが確認された。また『寛永十四年洛中絵図』(一六三七)などには、周囲の道路に沿って並ぶ町家に囲まれたこの町の中央部に、江戸時代の大名本多甲斐守の京邸があったことが記されている。

木簡が出土したのは、江戸時代初期の土坑SK二〇五三である。この土坑は、検出位置や出土遺物の時期から、本多甲斐守京邸の北西部に掘られたゴミ廃棄土坑と推定している。土坑内には、シルト層・砂層・灰層・炭化物層・腐植土層・焼土を含んだ層など多数の層が重層しており、最下層には加工痕のある板材や、ほぞ孔を取った角材の切れ端や鉋屑・大鋸屑などの建築廃材が多量に堆積していた。各層からは一七世紀前半に属する土器・陶磁器類や、貝殻・魚骨・鳥骨などの食物残滓、イヌ・ネコ・シカ・カメなどの獣骨、木製品、漆製品、煙管などの金属製品といった豊富な遺物が出土している。最下層の建築廃材は本多家の京邸造営に関わる可能性が高い。土坑内に堆積していた塵芥の中には、灰や炭片など他の場所から運ばれてきたものばかりでなく、木片や生ゴミを土坑内で焼却した形跡も認められた。また堆積状況からみても一時期に埋め戻されたのではない。おそらくこの土坑は造営時に廃材の捨て場として掘られ、その後ある程度の期間、ゴミの廃棄場所として使用されていたもの

と推測できる。土器類の年代は本多家が当地に存在した寛永年間（一六四〇～一六四四）にほぼ一致している。

8 木簡の釈文・内容



- (1)は頭部両側に切り込みを入れる。墨痕はきわめて薄く判読困難。
- (2)は逆宝珠形で、上端中央に上方に広がる突出部を造る。墨痕は三行確認できるが、中央最下の「屋」以外は不明瞭である。
- (3)は木栓状の製品で、断面形状は本来円形であったと思われるが、楕円形に変形しており、上端部はくぼんでいる。底面の墨書は井桁状の記号か。
- (4)はほぼ中央から左半が遺存している。頭部に切り込みを入れる。

(平尾政幸)

